

CACS FORUM No.12 の発行に寄せて

研究機構長 重原 孝臣

新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大が始まって早一年半余り。この間、科学分析支援センターでも独自の新型コロナウイルス対策基準を定め、感染防止に努めてまいりました。入退館者・入退室者に対するエタノール消毒やマスク着用の徹底、換気対策のために扉が完全に閉まらないように各部屋の扉への補助具の設置、講習会時の参加人数制限等の措置はその一環です。感染防止対策はサービスの受けやすさとは相反するところがあり、利用者の皆様にはご不便をおかけしているところが多々あるかと思いますが、今後も感染防止を最優先に、他方でサービス低下を招かないように教職員一同、工夫を重ねる所存ですので、センターの活動に対して引き続きのご理解・ご支援を宜しくお願いいたします。

新型コロナウイルスのパンデミックは、個人的には、自然を「恐れる」と「畏れる」との違いについて改めて考えさせられる機会になりました。「恐れる」は、強大な威力を前にして怯え、縮こまること。「畏れる」は、自分を遙かに凌駕する存在を目のあたりにして震撼・おののくこと。読み方は同じでも意味は大きく異なります。遠藤周作(1923～1996、小説家)は著書「勇氣ある言葉」(1978)のエッセイのなかで、「畏れると恐れるとのちがいを若い人は知っていない」と述べていますが、発刊当時まさに「若い人」であった私自身にとっても、今回のパンデミックの状況から、「恐れる」と「畏れる」の違いがはっきり感じとれます。この原稿を書いている2021年8月末現在、日本は第5波の渦中であって、ワクチンの普及も十分に進まないなか、若年層にも感染が広がり、自宅療養を余儀なくされる患者も急増しています。今「最も恐れているのは何ですか？」とアンケート調査すれば、おそらく多くの方が新型コロナウイルスへの感染を挙げるだろうと思います。恐れというのは感情の問題であって制御できない側面もありますが、他方、正確な情報があれば「恐れるに値すること」と「恐れるに及ばないこと」との区別ができるようになります。社会に徒に恐れを感情を広げないためにも、正確な情報が何より大切です。寺田寅彦(1878～1935、物理学者、随筆家、俳人)は、1935年の浅間山の小噴火の際に麓の駅で、山を下りてきた学生が「大したことはない、大丈夫」と駅員に言うのに対し、駅員が「いや、そうではない」と応じるやり取りを小耳に挟んで、「ものをこわがらな過ぎたり、こわがり過ぎたりするのはやさしいが、正當にこわがることはなかなかむづかしい」と感想を残したそうです。今流に言えば、正しく恐れることの難しさを述べているとも言えます。私たち大学人にとって、科学的知識やデータに基づいて、新型コロナウイルスを正しく恐れる術をわかりやすく社会に提供し続けることは大切な役割だろうと思います。

新型コロナウイルスに留まらず、疫病・地震・津波・豪雨・水害・土砂崩れ・山火事等々の自然の脅威を世界各地で続けざまに目のあたりにする昨今、自然を正しく恐れるとともに、自然を畏れ、同時に敬う気持ちを忘れてはならないように感じます。科学・技術は部分的には自然を制御する力を持ち合わせていますし、今後もその守備範囲を広げていくことでしょう。しかし、完全な制御は不可能です。そのことを自然は私たちに教え続けてくれています。科学・技術の時代にあっても、私たちは自然に対する畏敬の念を大切にしたいものです。